

高橋和巳

——〈瞬間の王〉の文学——

綾 目 広 治

一

「文学の責任」(昭32・3)は、高橋和巳がまだ作家として無名であった二十代の時に書かれた評論だが、ここには、その後の作家活動を通して終生変わることのなかった、文学についての彼の基本的な考え方が示されている。

この評論の中で、高橋和巳は、文学、とりわけ小説は価値の領域と関わりを持つものであり、小説の基底が想像力にあるとしても、日常的な論理や社会倫理から隔絶するところがあつてはならないこと、また、小説は根本的には認識論としての性格を持つものであると述べている。

価値領域との関わりについては、「戦後文学私論」(昭38・7)では「相依」の理論として展開されている。つまり、人間は一つの行為においても、その中に一つの目的、もしくは一つの意味のみを持たせているのではなく、そこには

様々な意味や目的が混在する「目的経済性」がある以上、その人間の行為を扱う小説は、人間のあらゆる価値領域に関わらざるをえないという「万物相依」の考え方である。

「戦後文学私論」は、戦後文学論争の中で書かれたものであり、高橋和巳は、この「相依」の理論にもとづいて、文学から政治を排除することへの批判を語っているわけだが、政治の領域をも含めて様々な価値領域を取り込もうとする全体小説志向のいちはやい表明が、「文学の責任」において語られていると言えよう。

小説が認識論の側面を持つということに関しては、高橋和巳は、それはけつして事実の伝達という意味ではなく、「日常性の殻をやぶり、思惟の慣性・イメージ連鎖の惰性をつきやぶる」こと、「読者の日常自足的な形相をゆりうごかす」ことであると述べている。小説が虚構であることは言うまでもないが、しかし、今ある現実も人々が思っているほどに絶対的なものではなく、むしろ、「われわれの

日常生活的存在形式がひとつの虚構である」とも言えるので、小説は、その独自の虚構の方法をもって現実を、もしくは人々の現実観を相対化する視点を読者に提示する、というわけである。つまり、小説は、人々の常識的な考え方の、その「意識の座標変動」をひき起こすのである。

このように政治をも含んだ現実の総体に立ち向い、それを相対化していくことが文学の任務であるとされるのだから、「文学の責任」は重たいものにならざるをえないのだが、ここで注意したいのは、現実を相対化するという場合、想像力の発動によって架空の視点からそれを行うという点とだけにとどまらないことである。むしろ、高橋和巳の場合、過去のある時点の「残像に固執することによって、現実を批判する」(「現代における想像力の問題」昭46・3)という方法が取られるのである。

たとえば、各人の生死にかかわる体験内の〈瞬間の王〉とでもいべきものに固執し、あるいは武装された政治的理念が突如ひんむかれ無に還元されてしまった際の、個人の概念を絶対化することによって、あるごとくありそれ以外にありようのなかったように見える歴史を、逆に虚構視することである。(「戦争文学序

説——運命について——」昭39・12)

全体小説志向や、あるいは情性化した日常的思考に揺さぶりをかけることに文学の機能を見る考え方は、今日

ではとりたてて珍しいものとは言えないが、高橋和巳の場合、特徴的なのは、この引用からも窺われるように、〈瞬間の王〉、つまり過去のある時点に固執することによって、今ある現実の虚構性を暴こうとすることである。そして、高橋和巳にとってその過去とは、「各人の生死にかかわる体験」すなわち戦争体験と、もうひとつは、「政治的理念」が無に帰するような体験に多くの青年が直面せざるをえなかった、昭和二十年代の革命運動であった(といっても、彼は運動の周縁にいただけのようなのだが)。つまり、戦争や革命という限界状況の体験に固執することによって、戦後の社会を「虚構視」しようとしたのが高橋和巳の文学であったと言うことができる。たとえば、評論「極限と日常」(昭43・8)では、人々が戦争時の「極限」の体験の意味を深めることがなく、「日常」に埋没してしまっていることが批判されているが、高橋和巳の小説の多くは、そういう戦後社会のあり方に対する異議申し立てであった。以下、この観点から、彼の主要作品のいくつかについて見ていこう。

二

「あの時は皆がおかしかった。忘れようじゃないか。おたがいその時にどうしたかなどあばきあうまい。」——戦

争体験を忘却しようとする、この戦後の風潮に対して、『日本の悪霊』（昭44・10）の落合刑事は、次のような思いを抱いている。

そして正直者が馬鹿をみ、最も真摯なる者がもつとも手非道く愚弄され、腹のにえくり返るほどくやしいことながら、そこで立ちどまって考えつめることによつて訂正すべき、日本人の心情の根本的なずるさがそのまま看過されたのだ。

特攻隊の生き残りであり、戦後社会から取り残されている落合巡査と、自己の過去の行為（革命運動）がただ無意味に風化していくことにたえられず、故意に奇妙な強盗事件を引きおこして逮捕された村瀬狷輔とは、それぞれがこだわる過去には相違があるものの、同じ心情の中にあると言えよう。それは、「転換する時代の裂け目にはまり込み、不意に自己の価値を剝奪された者」の持つ遣り場のない怒りである。村瀬は、革命運動で殺人を犯しているのだが、その罪に見合った正當な懲罰さえ与えられない。もつとも、そこにはその事件の真相が暴かれることを恐れている支配層の思惑がからんでいるということもあるが、そのことよりもむしろ、時代そのものがすでにその事件をもちや過去のものとして、あるいは無かったこととして葬り去ろうとしているのである。

『日本の悪霊』は、革命運動におけるリンチ殺人の問題

も扱われているが、それは必ずしも十分に発展させられていたとは言えず、その問題よりも、過去の出来事が持つ意味を掘り下げることなく移ろいでいく戦後社会に対する告発の方が主題となっている。それは、また、日本人の健忘症に対する批判でもあったのだが、さらに言えば、個人の生死や個々の出来事を無雑作に押し流して行く歴史に対する告発でもあったと言える。『日本の悪霊』より以前に書かれた『憂鬱なる党派』（昭40・11）では、その問題が正面に据えられている。

『憂鬱なる党派』の主人公達も、「転換する時代の裂け目にはまり込」んだ青年であり、過去の体験にこだわるゆえに、いわば現実不応の状態に陥っている。『日本の悪霊』の主人公達と同じく、戦争の影をひきずるか、もしくは、戦後の革命運動時代のエアポケットから抜け出せないでいるのである。後者の側の人間で、その才気によってともかくも一応の現実適応を果たしている、元学生運動のリーダーである古在でさえ、次のような述懐をしている。

「歴史というやつは冷酷なものでね。歴史が進行してゆく過程でどんな犠牲が生れても、歴史そのものは無雑作にその欠損を補って流れてゆく。」

歴史の無慈悲さを噛みしめているのは、古在ら革命運動家達だけではない。戦争体験に固執せざるをえない元特攻隊員の藤堂や、広島原爆にあった西村も、歴史の苛酷さ

を味わわされている。西村は、こう語っている。

「歴史というものが私たちに對して持つ意味が、納得できるかできないかも、結局、應報の観念が成り立つか成り立たないかによつてゐるんですね。(略)だが、現代の地獄は、應報の観念からはみ出しています。なぜ罰せられたのか？ 罰せられたからだ。これが現代の地獄の原理なのです。」

広島の被爆者達が本気で自らの考えによつて鬼畜米英を唱えていたのなら、その報いとしての死という意味でまだしも救いはあるが、彼らの多くは、ほとんど無意味な事故死のように死んでいった。そこには因果應報の観念は成り立たないというのである。むろん、この西村の言葉は、自分達の過去の行為が時の流れの中で空無化されてしまった革命運動家達の無念さとは異なつて、ある歴史上の一事件が、個人の生から見れば正当な応報性を持たないことに對する怒りから出たものであると言える。しかしながら、より大きな観点から見ると、両者の言葉はともに、個人の人生死や行為に對して正当な意味づけや理由づけのないまま、それら飲み込んで流れていく歴史の無慈悲さが語られてゐることにおいて共通してゐると言えよう。

歴史は、戦争も革命も、その中で傷つき死んでいった多くの人達のことも忘れ去り、そのような過去の出来事を氣にかけない新しい世代を確実に生み出して行く。「憂鬱な

る党派』の中で、西村達の乗った車を颯爽と追い越すオートバイの太陽族の少年達が登場する一場面がある。これは、石原慎太郎の『太陽の季節』に衝撃を受けた高橋和巳自身の体験が反映されているわけだが、それとともに、過去の体験にこだわり、歴史に應報の観念を求めるがゆえに、そのようなものは無視して流れていく歴史(戦後史)から取り残された者達の無念さが込められているエピソードだとも言えよう。

『憂鬱なる党派』の中で破滅しないのは、諦めの結婚をする日浦朝子以外では、放送局に勤める蒔田と大学の研究室に残った青戸の二人だけである。彼らがともかくも自分達の生活を破壊しないのは、蒔田が軽薄才子で世渡りがうまく、青戸が学者として厳しく自己限定しているためというよりも、むしろ、彼らが過去の体験に固執する生き方をしていないからである。しかし、他の青年達は、すでに述べたように、戦争や革命という極限状況の中で時は停止したまま、日常の繁栄を謳歌する戦後の歴史から置き去りにされて破滅していくのである。むろん、この小説は、そういう時の推移から脱落した敗残者達の愚痴をエレジーに包んで歌うことに主題があるのではない。それら破滅していった青春への鎮魂の歌が流れていることもたしかだが、戦争も戦後の革命運動も、その意味を曖昧にしたまま、浮薄に時を刻んでいく戦後の社会に対する批判の方に、作者の

意図が込められていたと言えよう。

『日本の悪霊』や『憂鬱なる党派』では、特攻隊帰りの人間もいるものの、今述べたような問題は、戦後の左翼青年達の方を主人公にして取り扱われていたが、『散華』（昭和42・7）や『墮落』（昭和44・2）では、戦前には右翼であった人物達を主人公にして語られている。たとえば、『墮落』の主人公青木隆造は、かつて満州国建国に携わり、戦後は混血児の施設を営んでいる人間である。施設の経営は、敗戦時に自己の身替りに自分の子供を見殺しにしたことに対する一種の罪滅ぼしとも見られるが、戦後の青木は、いわば「内なる曠野」を心の中に抱いたまま、かろうじて残っている「共同体人」としての自覚に支えられて、内部の虚無を包み隠して生きてきた人間である。そういう彼が、施設経営の社会事業としての功勞を表彰されるのである。その時から、彼は内部のバランスを失い、ころげ落ちるよう

に墮落していく。

この小説は、戦争中の自らの行為の意味も、その責任も十分突き詰めることなく戦後を生きてきた人間が、自ら破滅することによって、すなわち、そういう戦後の自分のあり方を否定することによって、彼と同様に戦争の問題を曖昧にしたまま復興した戦後の日本国家に対して、その戦争責任を、そしてそれを不問に付してきた戦後責任を突きつけた作品と言えよう。そう考えるならば、表題になっ

る「墮落」という言葉は、青木隆造の表彰後の転落だけをさすのではなく、青木の戦後の全体を、さらには日本の戦後全体をも意味しているように考えられる。

三

これまで見てきた作品は、歴史から脱落していく人間の目を通して、日本の戦後を批判するという方法がとられていたが、小説の虚構性を最大限に生かしながら、戦後日本を相対化する観点を提示しようとしたのが、『邪宗門』（昭和41・10、11）と『我が心は石にあらず』（昭和42・10）であったと言えるだろう。高橋和巳は、『文学思想史』（昭和39・11）の中で、人間が現実の中で相対的な存在にすぎないのはいまでもないが、しかし、歴史の方もまた相対的なものではないかと疑ってみる必要がある、と述べている。

つまり、人々は普通、歴史は、かくあったもの、また、かくあるもの、そしてそれ以外にはないものというふう

に思いこんでいるが、実は、この歴史のほうの間違っており、あるいは他にもありようがあった可能性の、ただ一つの現象にすぎないのではあるまいか、といった疑念です。

『邪宗門』と『我が心は石にあらず』は、日本の宗教運動史や労働運動史には実在しなかった出来事が、「他にも

ありようがあった可能性」として追求された小説である。そして、注意されるのは、この二つの小説には、高橋和巳がおそらく抱いていたであろうと思われる変革のヴィジョンとともに、彼の中にある性向がよく現われていることである。

『邪宗門』では、教主が二つの遺書を残すが、その一つは、男女が睦み合い、牛馬などの動物や、山野、田畑などの自然をいたわり、互いに許し合うことで穏和な日々がもたらされるといふことを説いた、許しと愛の教えであり、もう一つは、驕れる者、富める者、そして権力の座にある者に怒りと裁きをもたらす呪詛と復讐の教えである。登場人物では、前者を代表するのが松葉幸太郎と阿貴で、後者は、阿礼、足利正、そして千葉潔によって代表されている。作者は、最終的に阿貴を生かすことで、穏和な愛の宗教にかすかな期待をかけていたとも思われるが、しかし、それは作品全体の中ではいわば微光にすぎず、作者の筆は、ひのもと教を呪詛の宗教として描き出す方に傾いていつていふと思われる。そして、その方向において、ひのもと教は、門外不出の奥義書に「救済とは何ぞや、死なり／死とは何ぞや安楽なり」と見られるような虚無的な思想を根幹に持つ邪教として性格づけられているのである。

結局、ひのもと教霊会は、「支配とは何ぞや、悪業なり」（奥義書）という、人の支配に対して、〈世直し〉の絶望的

な蜂起を行い、壊滅していくのだが、興味深いのは、生き残った者達も、動植物を食って生きてきたことの贖罪として、飢餓行のうちに死んでいくことである。ここにジャイナ教の影響があることはいうまでもないが、ひのもと教の呪詛は、単に世俗社会の権力者のみに投げつけられるのではなく、自らをも含めた人間存在の全体に対して突き付けられているのである。したがって、その絶望的な蜂起も、人間存在である自己そのものをも抹殺しようする自己否定的な情熱に支えられているという趣きさえある。その教義が最終的には〈死〉に救いを見出しているのも、〈死〉が自己否定の極限のかたちだからである。これまでとりあげてきた小説にも、自己処罰的な否定衝動に駆られる主人公達が登場していたが、『邪宗門』では扱われている題材が宗教であるため、その否定は、歴史社会的な次元を越えて、人間存在そのものに向けられているのである。

おそらく、この否定の情熱に高橋和巳の基本的な性向を見ることができよう。もともと、彼自身の意識の中では、否定は単に否定に終わっているのではなかった。高橋和巳は、自分の発想を説明する際に、マイナスのカードを全部集めるとそれらが全てプラスに転化するトランプゲームの例を、評論などでよく引き合いに出しているが、『邪宗門』においても、その自己破滅的な蜂起は、「否定の契機、一つの媒介項として生かされる」、「組織としての教霊会は滅

びても、志を継ぐ人間は必ず出てくる」というように、肯定へと転化するものだと少なくとも指導者達には考えられていたとされている。

『邪宗門』は、このように作者がその自己否定的な資質を宗教の教義にまで高め、さらにそれを歴史的な事件にまで押し広げた小説であるが、物語の時期が昭和六年から昭和二十一年まで、すなわち満州事変から終戦直後までの間に設定されているところなど、やはり、戦争と戦後革命という作者年来のモチーフに支えられた小説であると言える。とりわけ、最後の武装蜂起は、その章題の通り「あり得ざりし歴史」であって、全く架空の事件を構成することによって、戦後史の、もつとと言うなら戦後革命のもう一つの可能性を示そうとしたものであった。

その可能性を宗教運動ではなく、労働運動を題材にして追求したのが『我が心は石にあらざ』である。そこにおける変革のヴィジョンは、『邪宗門』のような壮大さは持っていないが、その反面、扱われているのが労働運動ということもあって、より現実的なものになっている。主人公信藤誠が組織する、ある地方の労働組合の連合体は、科学者同志の協力形態を労働組合に応用した組織原理で結ばれ、互いに苦しみを分かちあう「共苦」の思想と政治的には「平和革命」とを理念として持っている。この考え方は、『邪宗門』で言えば阿貴の系列に属する穏和な変革思想であり、

高橋和巳の実際の政治理念も、このようなものであったと思われる。

しかし、作者は、その変革のヴィジョンを作中で十分実らせることなく、他の小説と同様、結局は主人公を破滅の情熱に駆り立てさせ、主人公の変貌によって穏和な集団から先鋭的な集団になった労組の連合体も、争議に敗北して解体していくという筋書きにしている。この主人公の変貌の過程には女性問題がからまっていたり、また、この特攻隊帰りの主人公が、他の小説の作中人物にもしばしば見られるように、戦後社会に対して違和感を持っていて、それが危機的な状況で噴出するというような、高橋和巳らしい人物設定になっているという問題もあるが、ともかくも、『我が心は石にあらざ』は、高橋和巳の抱懐する現実的な変革理念が、戦後の「あり得ざりし歴史」として語られた作品であったと言える。

四

駆け足で高橋和巳の主要作品のいくつかについて見てきたわけだが、これまでの瞥見からでも高橋和巳の文学の特徴について知ることができるだろう。たとえば、彼の文学上の師であった埴谷雄高との相違である。それについては、高橋和巳自ら、「私の文学を語る」（昭43・10）などの対談

で、埴谷雄高の文学は架空擬視の文学であり、自分の文学もまた「妄想型」である点で共通しているが、それとともに仏教で言う「還行」があるところが埴谷雄高との相違である、と述べている。つまり、非現実一点張りではなく、現実に「還行」する側面もあるというわけである。たしかに、両者ともに「妄想型」の文学を自称しながらも、埴谷雄高の場合は、ひたすら「nowhere, nobody」の場所（『死霊』自序）にその妄想がのびていくのに対して、高橋和巳の文学は、「あり得ざりし歴史」の場合でも一応現実の中に小説の時空が設定されている。

しかし、両者の相違はそれだけではない。現実を相対化するというとき、埴谷雄高は、いわば未来を同盟者にしてその視点から行おうとするのである。未来を志向すること自体、そこにある種の明るさが伴ってくるが、しかも埴谷雄高の場合、その未来が無階級社会であると想定されているのだから、そのニヒリズムには、通常とは異なってオプティミスティックな色合いさえあるのである。埴谷雄高は、高橋和巳との対談で、「僕はニヒリズムを支えにしているけれど、その本質は人間信仰、というより人間の思考信仰の極致みたいなところにある。」（『夢と想像力』昭43・10）と語っているが、彼の未来のオプティミスティックな希望は、その「人間の思考信仰」と結びついているとも言えよう。

一方、高橋和巳は、これまで見てきたように、過去のあつた時点にとどまって、今ある現実を指弾するという方法をとるのである。しかも、その視点は、歴史から脱落していった者や死者達の視点であるから、どうしてもそこにはある種の暗さと悲哀の色調が出てくることになる。また、人間やその思考に対する信仰という点では、埴谷雄高とは逆にむしろペシミスティックであると言えよう。遺稿『遙かなる美の国』は、高橋和巳の意図としてはユートピア小説となる予定であつたらしく、したがって、あるいはそこで未来への希望も語られることになつたかもしれないが、しかし、残された断片を読む限りでは、その出だしは夢と憧憬が喪われていく、やはり暗い色調の話である。

このような特徴の上に、もう一つ付け加えるなら、『邪宗門』の中の蜂起に典型的に現われているように、そこには現実的で具体的な展望はほとんどなく、ひたすら破滅や死によって人々に覚醒を促すという発想があるが、これは、高橋和巳の抱懐する政治思想とは逆にむしろ右翼的な心性に近いものとも言える。竹内好は高橋和巳との対談で、「あなたには戦後文学プラス日本浪漫派があるような気がする。」（『文学 反抗 革命』昭44・3）と語っているが、たしかに高橋和巳にはそういう一面があると思われる。

それはともかく、そのほか、高橋和巳の小説を論じるとき、しばしば言及される、作中での女性の扱い方の問題、

また、小説の方法に関して言えば、文体の問題などがあるだろう。それらの問題をあげつらうことは、かつてはいた高橋信者の熱を冷ますことには役立つが、今日再び取り上げる必要はないであろう。それよりも今日の時点から振り返って興味をひかれるのは、彼が終生こだわった知識人の問題である。これまでの論述では、その問題に触れることがなかったが、高橋和巳の小説の主人公達はほとんどすべていわゆる知識人であり、その意味でも彼の文学は知識人文学とすることができるとりわけ、彼の出世作である『悲の器』（昭37・11）では、知識人の問題が正面に据えられ、高橋和巳が抱いていた知識人像が、その正負の両面をあわせて主人公正木典膳のうちに造型されている。

正の面について見るならば、正木典膳が、大学の最終講義で、知識人とは、専門的な領域での文化の推進者であるとともに、「世界を鳥瞰できる」視点をもって正義に寄与する人間である、ということ述べているが、これは、作者自身が持っていた、あり得べき知識人像であったと言える。もっとも、「世界を鳥瞰できる」云々というような、サルトル的に言うならば、普遍的な問題に関わらざるをえない主体としての知識人というふうな概念自体が、今日では成り立ちにくくなっていることは事実である。知識人の終焉が語られるのも、無理からぬことだと思われる。

このような今日の状況を視野に置きながら、知識人文学

としての高橋和巳の作品や評論からどれだけのものが残るのか、あるいは残らないのか、また、知識人文学の系譜（便宜上そう言っておく）の中でどういう位置を占めるのか——さきに、興味をひかれると述べたのは、このようなモチーフからである。

その問題は、稿を改めて論じるとして、最後に触れておきたいのは、高橋和巳の命を縮めることになった、一九六〇年代末の大学紛争との関わりである。

五

全共闘運動については様々な見方が成り立つであろう。最後の大規模な左翼運動という見方もあるだろうし、管理社会に対する最初の大規模な反乱という捉え方もあるかもしれない。その認定は歴史家に任せるとして、ここでは、全共闘運動が提起した問題や、その運動体としての特質などについて簡単に見ておこう。

全共闘運動が突き付けたのは、戦後的秩序と呼ばれているものが、実は欺瞞的なものでしかないのではないか、という問題であった。平和は形骸化し、学問の自由は産学協同路線で骨抜きにされ、民主主義も戦後社会の矛盾を覆い隠す制度に墮しているのではないか、といった問題提起である。そして、その欺瞞の典型が大学なのではないか、と問

いかけたのである。

大学を問題とする以上、当然、全共闘運動は政治運動の側面とともに、大学とは何か、学問の自由とは何か、ということの問題にする文化運動の性格も持っていた。また、大学を批判の俎上に乗せることは、ひるがえってその大学に学ぶ自分とは何かというふうに、相手に対してだけでなく、自らをも批判の対象にすることになるわけで、そこに「自己否定」ということが叫ばれる理由があった。あるいは、自己自身への問いかけが重視されたところに、この運動の実存的な性格があったとも言えよう。そして、その性格が組織、運動体にも反映して、全共闘運動は、個々人の自発的な参加によって担われる、自由な連合体としての運動を展開した。前衛が指令を出すのではなく、学生大衆の直接民主主義がその行動原理であったのである。

戦後の秩序に対する批判、自己否定、運動における個人の自由の尊重——このようにその特質をあげてみると、高橋和巳が全共闘運動に共感を寄せたのも納得できよう。たとえば戦後の秩序に対する批判は、戦争責任を曖昧にしてきた戦後責任の問題とも関わってくるわけで、この問題が高橋和巳年来のテーマであったことは、これまで述べてきたとおりである。高橋和巳もその中に含まれる戦中世代の助教教授層が、戦争当時すでに教官であった人々の責任を追求することをしないで、自分達もその問題を避けて通って

きたことに触れながら、次のように述べている。

教授層を問いつめなかった思い遣りは、それ自体悪くはないが、しかし、相手を問いつめることは自分を斬りきざむことであることの内面の阿修羅を避けたことで、自分たちが敗戦後に戦場から復帰した時、ほとんど無葛藤的に学園にすべり込み、自己の内部でも、極限的体験を学問の過程(略)に生かそうとしなかった。その報いが、戦後二十数年たって、戦後民主主義によって育てられた学生たちの問いとなってあらわれてきたのだとも言える。(『わが解体』昭46・3)

また、自己否定の論理については、このように語っている。

全共闘運動というのは、いろいろ定義することができますが、単純に一語で言ってしまうえば、拒否の精神であり、全否定の精神です。これは自分の属している現実世界を全否定したら、その矛盾は自分に帰ってきて、論理的にいえば自殺にまでいたらざるを得ないということ、誰にもわかってのことですが、それをああやって、ある程度までやろうとした運動が、全共闘運動だろうと思っています。(『自殺の形而上学』昭46・2)

自己否定が「論理的にいえば自殺にまでいたらざるを得ない」というのは、いかにも高橋和巳らしい解釈と言える

が、自己否定という発想そのものが、高橋和巳自身のものでもあったことは贅言するまでもないだろう。さらに付け加えて言うなら、全共闘には、良きにつけ悪きにつけ、ラディカリズムがあったが、そういうところも高橋和巳を引き付けたのではないかと思われる。たとえば、具体的な展望を示すことなく、ひたすら封鎖を貫徹しようとしたり、戦術的には無効とわかっていても、敗北覚悟でいちずに正面突破にこだわったりしたところなど、高橋和巳の小説中の人物達の行動に似ているのである。

しかし、高橋和巳は、全共闘運動を終始全面的に認めていたのではない。さきに、全共闘運動には個人の自由の尊重があったと述べたが、その尊重は個人の存在の掛け替えの無さというものの認識が前提になっていたはずである。しかし、それはやがて崩れていった。運動が沈滞を余儀なくされ、運動の場は大学から街頭へと移り、運動の主導権も無党派層から党派に渡り、運動そのものが内攻していった、やがて数々の悲劇を生むことになるのである。高橋和巳は、「内ゲバの論理はこえられるか」(昭45・10、11)などで、未来を担う運動は必ずその過程の中で新しい道義性を築くものでなければならぬこと、内部の査問には必ず一人でいいから大衆を加えて公開性を維持すべきであることなどを提言するが、多少なりとも彼の影響力を及ぼすことのできた無党派層が運動から離脱していった時点では、

もはや、何の効力も持たなかった。

しかし、そういう問題はあるものの、戦後社会に対する批判にしる、自己否定の論理にしる、これらはまさに高橋和巳の文学の主題でもあったのであり、それが現実の運動として展開されたわけだから、この全共闘運動の時期が、高橋和巳がもつとも時代とともに共振した時期であったことは確かである。

高橋和巳は、大学紛争の渦中で病いに倒れ、一度は回復するものの、遂には逝ってしまったが、その病中に書かれたエッセイに「三度目の敗北——闘病の記」(昭45・9)がある。その中で小松左京の言葉を引きながら、高橋和巳は、自己の生涯の中の三つの敗北について述べている。その敗北とは、一度目は昭和二十年の敗戦、二度目は昭和二十年代の革命運動、そして三度目がこの度の病いである、と。もちろん、この三度目の敗北は、単に病いを指すだけでなく、全共闘運動に関わった自己の敗北としての病いという意味が込められている。

高橋和巳の小説が、一度目と二度目の敗北の体験に固執することで書かれたものであることは、すでに見てきたとおりである。ところで、そうであるとするならば、この病い以後の作品も、やはり、この三度目の敗北の時点へ瞬間の王として、それ以降移り変っていった日本の社会を

「虚構視」するようになったのではなからうか。一度目の敗北も、二度目の敗北も、過去のものとして押し流して行った日本の社会やその歴史に対して異議申し立てをしたのが高橋和巳の文学だったのだから、もし彼が生きていたら、三度目の敗北——単に高橋和巳個人の敗北ではなく、全共闘運動の敗北でもあるが——を遠い過去の出来事として忘れ去っている現在の状況に対しても異議申し立てを行ったかもしれない。

むろん、それは想像の限りでしかないが、早いテンポで変化していく時代に対して、過去のある時点に視点をとどめることによってそれを相対化していくという彼の方法が、一つの有効な方法であることは間違いないであろう。

〔付記〕引用は、『高橋和巳全集』（河出書房新社）によった。高橋和巳の作品の発表年月については、原則として、小説は単行本発刊の年月を、評論は雑誌発表時のものを記載した。

（ノートルダム清心女子大学）